

## 親も子どもともに **1**の学び、はじめませんか！ Part.2

～自立した大人になるための、よりよい道筋をつけるために～

前回、「サイモンズ式分類」の親子関係の診断テストについて紹介しました。そこには、4つのタイプに分類されるということが述べられていました。今回は、親子関係のバランスの保ち方について、親は子どもに対してどのように心がければよいのか考えていきたいと思います。

### **+**かまいすぎタイプをセーブするために

親はついつい心配して、子どもが失敗しないようにと先回りしがちです。でも、実はこの失敗にこそ、次を成功に導く鍵が隠されています。できるだけ黙って見守るスタンスで、手を出しすぎないようにしましょう。どうにかして、子どもが自分から失敗を回避できたら、たっぴり褒めてあげましょう。そして、失敗したとしても、そこから何かを見い出したなら、失敗した事実ではなく、新たな発見を褒めてあげましょう。

### **+**残忍タイプをセーブするために

子どもにある行動を促したい場合、子どもが主体的に考えてアクションができるような「質問」をつくるようにしましょう。子どもはただ何かを「やれ」と言われても反抗しがち。中には従順に従う子どももありますが、これでは自分で考える習慣はまったく身に付きません。小さな質問を繰り返していくと、子どもも徐々に答えを探す方向性を見出せるようになります。答えに正解はありません。子どもが「自分で考えた」という過程を評価してあげましょう。

### **+**兄弟のどちらかに対しての無関心タイプをセーブするために

上の子にはつい、「お兄ちゃんだから」「お姉ちゃんだから」と言って我慢させてしまうことは日常生活の中では往々にしてあることです。子どもも自分の立場は分かっています。兄弟姉妹で比べると、その子の過去と今を比べ、できるようになったことを見つけ、たっぴり褒めてあげましょう。同じ家庭に育っていても、ひとりひとり違った人間なのだと親がしっかりと認識しておくことが重要です。どの子にもしっかりと関心を向け、あなたのことを愛しているということを伝えることが大切。兄弟それぞれの個性に寄り添って対処を変えていきましょう。

### **+**残忍タイプをセーブするために

子どもが心を許している、大好きな人たちを否定することを言うのは良いことではありません。そもそも人の悪口を、本人がいないところで好き勝手に言って、本人がいたら言わないといったふるまいは、子どもにとって良い影響を与えません。自分を否定されたような気持ちになり、顔色をうかがう性格になってしまうことも。子どもにとって大切な存在となる人の悪口は、子どもの前では決して言わないようにしましょう。悪口を言うことは、その人を蔑むだけではなく、自分自身をも貶める行為につながっているのです。子どもは大人の振舞いをしっかりと見ています。

### **+**甘やかしタイプをセーブするために

『うちはうち、よそはよそ』。これを徹底できるかどうかで、その家の子育ての基軸が決まります。それぞれの家庭には、それぞれの家のルールがあります。それは全員が健全で明るい生活を営んでいくうえで必要だと思われることをそれぞれの家で決めたものです。「守るべきものだから守りなさい！」という押し付けではなく、そのルールの素晴らしさを子どもに理解させ、他の家のルールと比べる必要はないことを伝えておきましょう。“家のルールを守らせる”ことはもちろんですが、“家のルールを作る”ということも大切です。家族の一員として、ルールにのっとった役割を与えて、決められたことは守らなければならないのだと理解することは、社会に出たときにも必ず役立ちます。

これからの時代、「自分で考え、自分で動く」ことができる人が求められる世の中となります。親は子どものもっとも身近な手本として、人としてあるべき道を示すことができるはずですが、子どもの経験を尊重し、実り多き人生を歩めるよう、バランスの取れた養育態度で導いてあげたいものですね。

参考

キナリノ：心理学から導く子どもを伸ばすために親が心がけたい5つのこと